



米林雄一

彫刻家

東京藝術大学名誉教授

日本建築美術工芸協会会員

第 184 回フォーラムが 9 月 3 日、AGC スタジオにて行われました。文化事業委員会フォーラム部会長立石博巳氏司会により、協会 岡本 賢会長挨拶の後、「彫刻その宇宙への夢（宇宙モデリング）」と題した、彫刻家米林雄一氏の講演が始まり、第一部は自作品の紹介、第二部では宇宙モデリング国際宇宙ステーション ISS 内での映像 DVD 映写、軽量粘土でのワークショップなどが行われました。

第一部では米林氏の作品 10 点が紹介され、最初の作品は 1964 年に作られた「宇宙の客」（二紀会出品、セメント製）で、奇しくも後年 2008 年 JAXA 国際宇宙ステーション「きぼう」と関わることになることは夢にも思わなかったと思いますが、その当時から宇宙が好きだったそうです。

1968 年当時浅草寺にあった門の土台石をもらって 2 年がかりで制作されたお話とか、樗の一本に突進するかのように取り組みされたお話は米林氏の若い時代の情熱を感じました。また国際シンポジウムでチェコスロバキアにいらした時の 1968 年 8 月 20 日、ロシア軍がチェコスロバキアに侵入し空港が閉鎖になり、1 週間ぶりに外国人は国際列車でウィーンに出て、彫刻シンポジウムは慌しく終了となったお話、その時の作品も披露されました。

1970 年代になりますと、木と鉛の作品が多くなり、「毎日現代美術展」で東京国立近代美術館賞を受賞した時、故加藤貞夫先生の批評が毎日新聞に載り、とても励みになったそうです。



1980 年代は、形が円形に、より自由になり、野外彫刻にも取り組まれました。富山の山奥有峰ダムの広場にあるダム開設 50 周年記念モニュメントは滑り台も付いて、高さ 4 メートル 50 センチもある大きな作品でした。（写真左下）

最後に、2010 年第 22 回 aaca 奨励賞受賞作品「発展の塔」（神戸理化学研究所計算科学研究機構シンボルモニュメント）はソロバンを縦にしたような高さ 8 メートル 40 センチの天に聳えるような素晴らしい作品でした。抽象彫刻、パブリックアートの第一人者である米林氏の作品に触れて、彫刻の面白さを堪能いたしました。

第二部では、宇宙モデリング、宇宙ステーション「きぼう」が内映像 DVD で紹介されました。JAXA と東京藝術大学との共同研究により、「微小重力環境」での芸術表現は世界初、宇宙芸術への挑戦です。無重力の「きぼう」の中で、アメリカ人宇宙飛行士が軽量粘土で人型を作る。室温 20 度の中で船内の床に右足を固定して、地上と交信しながら人型を作っている様子はとても興味深いものでした。



アルミボックスに入れて宇宙から戻ってきた人型は異次元から来た不思議なものに思えました。

私たちにも軽量粘土が渡され、人型らしきものを作りました。宇宙からの視点による地球観と地球からの宇宙観、それぞれの発想を比較し、組合せることにより、人間についてのイメージが広がります。創造の領域もまた、広がることを想像しました。宇宙で感動を創る「きぼう」の活動など、国として取り組んでいるのは諸外国より日本が進んでいるそうです。米林氏の宇宙的視野の芸術に触れて、とても有意義な夜でした。

講演後の交流会では、多くの方が参加され、米林氏のお話の余韻に浸っていらっしやるようでした。

（フォーラム部会 村松勢津子）